

『色街に恋の花』

著:加納 邑

ill: 香林セージ

帳簿を筆筒の引き出しにしまい、筆の先からはきれいに墨を拭き取っておく。これから翌朝までの帳場は黒四が担当する。彼が使いやすいように自分が今まで座っていた机や座布団を整えてから、土間へ下りて靴を履く。

開けっ放しの玄関まで行って、小雨が降っているのに気づいた。

「雨……」

今日はずっかり傘を忘れてしまった。曇った雨空を見上げていると、大きな赤い傘が頭上に差しかけられた。振り返ると、牙月が片手を懐に入れて立っていた。

「ちょっと外に出る用事を思い出した。途中まで入っていけ」

相変わらず、ぶっきらぼうな声と表情だ。

「いいの？」

「どうせついでだ」

「うん……」

胸の奥をドキリと小さく鳴らし、朱は彼の傘に入っていっしょに歩きだした。

州国では、とくに今のような秋口、午後に小雨がよく降る。

温かな雨は、土埃の立つ道の表面をさっと濡らしただけで上がることが多い。しばらくどこかで雨宿りすればいいと分かっているから、つつい傘を忘れがちになってしまうのだ。

「そっこの肩が濡れるだろう、もっと近くに寄れ」

牙月に言われたが、朱は自分から彼の方へ近寄るなんてできない。傘の中で肩が触れ合ったりしたら、そこから自分の想いが伝わってしまいそうで怖かった。

(牙月と二人っきりだ……)

横顔を見ることさえ恥ずかしくてできないが、隣に温もりを感じられるとうれしかった。

色街の大通りには、客や娼館で働く者たちが軒先で雨宿りしている姿も多く見られたが、傘の中は二人だけの世界。短くともこうして牙月と二人きりの時間を持てただけで、朱の幸せな気分は今夜布団に入るまでずっと続くだろう。

同じ店で働いていても、朱が牙月といっしょにいられる時間はほとんどない。

朱が帳場で仕事をするのは、朝から夕方まで。

男娼館は、夜明けとともにいったん閉店する。帰っていく客を見送り、男娼らは正午にまた店が開くまで眠っている。その客のいない朝から昼までの間と、客の比較的少ない夕方までの時間を使って、朱は前日の売り上げの集計をするのだ。金の流れが止まる朝から集計を始めるのが楽だからという理由がつけられてはいるのだが、本当のところは、牙月が、朱が朝から勤務できるように便(べん)宜(ぎ)を図ってくれているのだ。

朱には身体の弱い兄がいる。朱が夜に店へ来て朝帰るようでは、彼の生活まで乱れて調子が悪くなる。そのへんを考えると、朱が夕方までに家に帰れるようにしてくれているのである。

牙月自身は、男娼たちと同じように早朝から正午の開店まで眠る。

朱が牙月と顔を合わせる可能性があるのは、正午から夕方までの二刻ほどだ。その短い間にも、牙月は仕事の打ち合わせだ、会合だと言って外に出ることが多い。帳場にいる朱は、一日に一度も彼の顔を見ずに帰ることもあり、そんなときには寂しい気分になってしまう。

だから今みたいに、偶然一つの傘の中で二人になれると、天まで昇りそうにうれしくなる。

「おい、これを持って帰れ」

色街の出口にある大門近づいてきたとき、牙月の足が止まった。

「え……？」

言われるままに手を差し出すと、その上に落とされたのは両手で持ってちょうどいいくらいの茶色の紙袋だった。少し重い。

「卵だ。昨日、都から来た知り合いにもらった」

「……僕がもらってもいいの？」

「お前にやるんじゃない、お前の兄貴にやるんだからいいに決まっているだろう」

「ありがとう」

心がほわっと温かく溶かされるような気がして、朱は紙袋を大事に懐にしまった。向かい合ったまま上目遣いに見ていると、牙月が少し照れくさそうに目を逸(そ)らす。

「兄貴が待ってるんだろう、早く帰ってやれ」

自分の手の中に傘の柄を押し込めて走り去ろうとした牙月を、朱はとっさに呼び止めた。

「あっ、傘っ！ 濡れちゃうよ、牙月っ？」

「俺はいい、お前は濡れるな。お前が風邪をひいて倒れたら、兄貴はどうする」

小雨に打たれながら、数歩先で牙月が振り返る。

「傘はいつでも都合のいいときに返せばいい。じゃあな」

細い横道へと走り入っていく彼。踵(きびす)を返す直前、大人の男の整った精悍な口元に、わずかな微笑みが浮かんだかに見えた。

朱はしばらく、大きな傘を手に道の真ん中に立ち竦んでいた。

傘を手渡されたとき、手に牙月の指が触れた。ほんの少しだけそこに残っている温もりが消えてしまわないよう、もう一方の手で右手をそうっと包む。

(牙月……)

心の中で名前を呟くと、切ない気持ちで胸が焼けるように熱くなった。

「牙月よ、相変わらずいい男ねえ」

横道に消えた彼に目をとめ、娼館の前で雨宿りをしていた娼妓たちがうっとりした目になる。

「牙月に誰か決まった相手がいるって聞いたことある？」

「色街の子といい仲だったら、すぐに噂になるもの。そんな相手はいないんじゃない？」

「だとしたら、私にも望みはあるかしら？」

紅を引いた唇で、身につけているあでやかな蝶や花が描かれた衣装に負けないくらい美しい女たちが、きゃあきゃあ、とはしゃいで笑う。

「牙月はやめとけ、男娼館の主人だぞ」

噂話に水を差したのは、彼女らの背後から外へ出てきた店の若い男だった。

「あら、でも、だからって、男しかだめってわけじゃないんでしょう？」

「男にも女にも興味はないんじゃないか、あいつはなによりも金が大事な奴だろう。先月の集金のときには、ツケの支払いの遅れた客を半殺しにしたって話だ」

男は口を醜く歪め、軽蔑の口調で吐き捨てる。

「そりゃ、色街じゃ金がすべてだけどな、あそこまで冷徹なのはどうかと思うぜ。五年くらい前だったか、俺はあいつが店で暴れてる客に小刀を突き立てたのを見たことがあるんだ。目の前で客が腹からポタポタ血い流して転がり回ってても、あいつは眉ひとつ動かさなかったぜ」

「……でも、お金を持っていない男よりはマシよねえ。若いうえにあれだけ素敵だし」

「そうよ、夢を見させてよ。こっちは毎日、脂ぎった中年男の相手ばかりなんだから」

牙月が少しでも悪しざまに言われるのを聞くのは、朱には辛い。

傘を持つ手に力を込め、唇をギュッと噛みしめた。

(色街の皆は、ああやってあの人のことを怖いとか、欲の皮が突っ張ってるとか言ってるけど、本当は全然そんなことないんだよ。僕もつい喧嘩ばかりしちゃうけど……でも、牙月がすごくやさしいのを知ってる)

三年前、自分たちを助けてくれただけじゃない。

黒四本人から聞いたところによれば、彼もまた牙月に救われているのだ。黒四が『花牙』に来たのは、朱たちが牙月に拾われた一年前。長年勤めていた店が急に潰れ、帳場の経験はあるものの高齢のためどの店でも雇ってもらえずに困っていたとき、牙月が家まで訪ねてきたという。彼がまだこの州国にやってきたばかりだった十年ほど前、同じ店で黒四に世話になったのを覚えていて、これからは自分の店で働いてくれないかと誘ってくれた。

牙月にはそういう義理堅いところもあるのだ。

(牙月……牙月は、喋り方もぶっきらぼうだし、性格も冷たく見えたり、激しいところもあったりして、けっこう複雑だから……どうしても誤解されやすいんだろうけど……)

朱は傘を手に、灰色の低い雨空を見上げた。

(……でも、僕は牙月のことが好きだよ)

気持ちは日々大きく膨らむばかりで、気をつけていないと不意に胸から溢(あふ)れそうになる。

(牙月、牙月……)

色街に霧のように温かく降る雨と、三年間、毎日嗅いできた州国の乾いた土の匂い。二つが混ざり合うと、なぜか牙月の匂いに似たものになる。

深く吸い込んだそれが、恋する朱の鼻腔を甘くくすぐった。

本文 p45～51 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>